

言語学が、なぜ存在しない文を扱うか

中条 太聖

京都大学・文学研究科

自然科学的な言語学を標榜する生成文法(以下GG)に対し、その特徴である非文(non-sentence)に焦点を当てて、科学哲学的な分析を与えることが本発表の目的である。

GGは、文法性判定装置の形式的理論を構築することが目的の言語学であるといえる。この文法性判定装置は、全ての可能な記号列を、文法的なものとは非文法的なものとは分類する関数と考えることができる。われわれはある文について、その文法性を直観的に判断できるが、そうした判断を可能にするところの関数とはどのようなものかを突き止めようとするのが、GGの試みである(Chomsky (1965))。

科学哲学の分野では、GGはモデル科学の分析の一例として、とりわけ理想化の側面から論じられることが多い(Nefdt (2016a,b); Allott et al. (2021); Terzian (2021))。理想化という観点はGGの重要な1側面であるが、しかしGGには科学哲学が扱ってこなかったもう一つの重要な点がある。それが「非文」(non-sentence)である。非文とは通常観察されることの減多にない文のことであり、非文をデータとして扱うことは、他の言語学と比較してGGに極めて特異的な営みである。GG研究の目標である文法性判定装置の理論は、可能な記号列を—いわば積極的に—構築する規則と、それらの記号列から非文法的なものを排除する—否定的な—規則から構成されていると見ることができる。ここでの取り除かれるべき記号列として考えられている非文という存在である。非文を語らずしてGG研究は語れない。

本発表では、(1)科学的説明における非文の役割について論じ、(2)非文とは何か・非文の創出がどのような営為なのかについて議論する。

(1)に関しては、科学的説明における非文は、関心ある(文法的)現象を明確にするための対比項として機能することを論じる。非文を対比項として捉えることによってもたらされる理解は次である。すなわち、非文を用いることは

「文法性」を分類することである。文法性を分節化する非文の存在が、GGを博物学にとどまらない自然科学として成立させている。

(2)については、関数としての文法判定装置 f という観点から論じる。以下はその概略である。GGの目的は f の振る舞いの理解することであると言えるが、しかし想像に難しく、 f は非常に複雑で、その全体像を一挙に説明することは極めて困難であろう。しかし、 f の局所的な振る舞いであれば理解、説明が可能かもしれない。 f の局所的な振る舞いを調べているために、非文が考えられるのである。正文をある次元において「ずらした」ものが非文であり、そのずれに対する f の振る舞いを観察することで、 f 全体の理解の一助としていと提案する。非文の創出とは、そのための非存在データの創出である。

Chomsky, N. (1965). *Aspects of the theory of syntax*. M.I.T. Press Cambridge.

Nefdt, R. M. (2016a). Linguistic modelling and the scientific enterprise. *Language Sciences*, 54:43–57.

Nefdt, R. M. (2016b). Scientific modelling in generative grammar and the dynamic turn in syntax. *Linguistics and Philosophy*, 39(5):357–394.